

# 土着化か、あるいは漢化か？——「漢族系台湾人」のエスニシティについて

三尾裕子

## はじめに

台湾が中国の一部なのか否かということについては、最近さまざまな主張、議論がある。国際政治の場では、世界中の多くの国々が、中華人民共和国を唯一の「中国」とみなし、台湾をその一部と見ているというのが現状である。台湾と中国大陸が不可分であり、どちらもが「中国」を構成する要素であるとの見方は、そもそも中華人民共和国政府、中華民国政府双方が一貫してそう主張してきたものであり、独立運動が盛んな現在の台湾においてもなお、そのような見方を持ち続けている人々がいることは事実である。

中国大陸では、「解放」当初の少数民族政策や社会主義理念が、文革の混乱を経て国民統合の手段として不十分であると考えられるようになり、その後の経済改革開放路線の中で、多様な民族の平等を確保し、少数民族の文化や権利を認めつつ国民を統合していく新たな理念が必要になった。費孝通が提唱した「中華民族多元一体格局論」はこのような雰囲気と歩調をあわ

せるように一九八〇年代後半に公にされた。その中では、台湾の問題は慎重に議論の外に避けられている。彼の議論の焦点は、「中華民族」とは、現在中華人民共和国内部に居住する多様な民族の寄せ集めではなく、相互に依存しあつた分割不可能な一体のものであり、その凝集力の核心は「漢族」である、というところにある。しかし、費は現在中国の領域内に住む諸民族を「中華民族」と呼ぶ、という領域的な限定をつけることによつて、台湾などに住む血統的には同じと考えられてきた中国人、華人や華僑などについて触れるのを避けている「毛里一九九八・七七―七八」。

同様な問題は、中華人民共和国と周囲の隣国との国境線をまたいで居住している他の民族、例えば、モンゴル族やウイグル族などにも関係している。ただし、モンゴルやウイグルのケースと台湾問題とが大きく異なる点の一つある。それは、国境をまたいでいる民族が内外の間で双方をどう認識しあっているか、という問題である。モンゴルやウイグルの場合には、実際に当事者たちが行動を起こすかどうかは別としても、双方が同

じ民族的な起源や文化を共有していると認識し、両者の間に国境がないならば、一つのエスニック・グループとして存続してもおかしくない、という思考が底流にある。それゆえ、中華人民共和国当局も、こうした觀念が、実際に分離して域外の同民族との統合を希求する運動に発展することを危惧することになる。中華人民共和国当局としては、領域外の諸民族に言及しないことよって、領域外への覇権や統治を想定しないと同時に、域内の諸民族を分離させないよう注意をはらっているといえるだろう。

ところが、台湾の場合には、中華人民共和国サイドからみると、政治的にはそれを不可分の一体の中に取り込みたいにもかかわらず、さまざまな要因があるために、かなわない現状にある。しかも、中国側は、台湾の人々のうち、もともと中国と同源である人々が、その人口の九割以上を占めていると認識しているにもかかわらず、である。ここでは、分離している状況を追認するのではなく、それを解消して内へ取り込もうとする点で、上記の諸民族との相違がある。さらに、厄介なことには、最近、台湾では、「漢族系」の人々が中国大陸と同一の起源や文化を共有していない、と見る考え方が生まれてきている。つまり、境界をまたいだ両側が同じ民族である、という前提すらも、保留される見方である。

本論文では、エスニシティが構築されるものである、という前提に立ちながら、現在台湾において「漢族系台湾人」のエスニシティがどのように想像され、また実体化されようとしている

のか、ということについての最近の動きを検討してみたい。台湾では、中国大陸との統一あるいは独立のどちらをとるべきであるか、という課題があるため、「国民」の範囲がはたして台湾内部だけで想像されるのか、あるいは中国大陸も含められるべきなのか、ということが議論の対象になる。ところが、このような問題は、最近では、「国民」を構成する台湾の諸「民族」、とりわけ、「漢族系台湾人」が、エスニックなレベルでも大陸の漢族と同一なもの、不可分なものであると想像しえない、という議論に向かっている。つまり、両者を分けることが、単なる政治的な問題だけではなく、むしろ実体化された民族の相違という点から補強されようとしている。そこで、現在台湾で想像（あるいは創造）されつつある、大陸の漢族と不可分ではない「漢族系台湾人」とはどのようなものかを考えてみたい。

なお、「漢族系台湾人」というかなり回りくどい呼称を使う理由として、ここではまず次の二点を前置きとして述べておきたい。まず第一点は、現在台湾に在任する「漢族系」の人々の中で、自らを大陸の漢族と違う民族である、と主張する人々が増えているため、分析上、大陸の漢族と区別した呼称が必要である。第二点には、現在、台湾におけるナショナリズムの興隆とともに、台湾に生まれ育ち、台湾に愛着を持つ人々が「台湾人」と呼ばれるようになっていく。この文脈では、「台湾人」にはさまざまな民族に属する人々が含まれ、言わば国民としての意味を含みこんでいる。そこで、一九四五年以前に大陸から

渡つてきた人およびその子孫である「漢族系」の人々のみに限定する呼称が必要である。そこで、本論では暫定的に「漢族系台湾人」という用語を用いることにする。「暫定的」という限定がつくのは、最終的にはこれらの人々が「漢族系」というものかどうか、というところすらも今日の台湾では流動的になつていると考えられるためである。

## 一 台湾における民族構成

まず、本論の核心に入る前に、今日の台湾における民族がどのような歴史的経緯の中で定義され、そのなかで「漢族系台湾人」がどのような位置づけにあるのかをまとめておきたい。

そもそも台湾に居住する人々についての記述の中で、今日の民族区分の基礎となつている最も初期の分類法は、清朝期の「生番」「熟番」という区分である。この区分は、台湾を統治した清朝政府が、台湾に古くから居住してきたオーストロネシア語族系先住民に与えた区分であり、前者を台湾島内に居住するものの清朝の統治下でない先住民、後者を清朝に帰順し、清の統治を受け入れた先住民とした。後者には納税義務があり、その多くが平野部に居住し、古くから漢族やオランダ人などと接触してきた。特に漢族とは交易や婚姻などを通じての関係が深く、早くから文化的にも漢族に同化する傾向があった。

さて、この区分は日本統治時代も基本的に踏襲され、前者が「生蕃」、後者が「熟蕃」と表記された。一九三五年には、「蕃」という蔑称を変えて、前者を「高砂族」、後者を「平埔族」と

正式に呼ぶことになつた<sup>4)</sup>。そして、台湾総督府が、全ての先住民を帰順させた後も、両者の区分は、文化的な漢化の度合いの区分として生き続けた。

中華民国期になつても、この区分は基本的には維持された。国民党政府は、「高砂族」を「高山族」あるいは「山地同胞」と呼び、「平埔族」との区分を維持した。しかし、「平埔族」は、行政区分上は漢族の方に組み入れられたため、実質上も名目上もほとんど消滅したに等しい状態になつてしまつた。今日、かつて「平埔族」に分類されていた民族の一部が、一九九四年に憲法に記載された「原住民」という分類に該当するものとして新たに民族認定を受けるようになっていゝが、それを構成する具体的な個々人は、かつて「高砂族」に分類されていた人で、その中から分離することが認められた人々である。二〇〇二年に民族認定がなされたクバランを例にとれば、かつて「平埔族」の一支として分類されていたクバランという民族名が認定され、もともと「高砂族」だつた先住民であれば、クバランに帰属を変更することが可能になつた。クバランに帰属を変えたのは、多くはかつてアミ族として登記された人である。しかし、平地の漢族に分類されていた元クバランの人は、「平埔族」であつたがゆえに戦後漢族に組み込まれたため、今日クバランとは認定されないというねじれた現象が生じている<sup>5)</sup>。

一方、「漢族系台湾人」についての呼称については、日本統治時代以外にはこれを呼ぶ呼称ははつきりしない。それは、ある意味で当然である。なぜなら、清朝や中華民国政府の支配者

層は、台湾にいる「漢族系台湾人」の人々を同種の間人と考えたためである。もちろん、どちらの時代においても、官吏、軍人など実際に支配権を行使した人々の多くは、住民より後から大陸より来た人々であったが、民族的な起源としては、それらの人々も、彼らより以前から生活していた人々も同じであると考えられたため、わざわざ「漢族系」の人々を指す呼称を必要としなかったものと思われる。ただ日本植民地政府のみは、被支配者の中で、先住民でない人々を指す呼称を必要とした。このため、このような人々を「本島人」と称したのである。戦後は、台湾を回収した中華民国政府とともにやってきた主に漢族の政府関係者、軍関係者と「本島人」の間に、政治的な対立が生まれたため、前者を「外省人」（台湾省の外からやってきた人）、後者を「本省人」と呼ぶ呼び方が生まれた。

ただし、「本島人」の中の下位区分としての大陸の出身地に基づく分類法は、清朝時代から存在し、さらに戦後も用いられた。それは、例えば、「閩南人」（福建省出身者）と「広東人」（あるいは客家系）と呼ばれる分類であり、「閩南人」はさらにその下位の出身地地方などに基づく分類（例えば、泉州人、漳州人など）もあった。このような分類を、台湾では「民系」と呼んでいるが、清朝時代には、「民系」による対立関係が見られたこともあり、また民系による文化の差異も見られた。今日でも、「閩南人」と「客家系」では、言語や風俗習慣に差異が見られる。

## 二 民族の境界の揺らぎ

ところが、実際の民族分類は、以上のようなモデルほどクリアにはいかなかった。例えば、台湾で最初に学術的な民族分類が行われた日本統治時代にも、分類は、あくまで研究者や官吏などの外側からなされたため、「高砂族」をいくつに分類することも、研究者のディシプリンの違いなどによって異なった。また、特定の先住民を「高砂族」に入れるか「平埔族」に入れるかについても、かなり恣意的な部分があったようである。例えば、サイシャット族は、最終的に「高砂族」に分類されたものの、当初は、漢族との接触が日常化し、文化も相当程度漢化していたために、「平埔族」に分類するべきであるという意見も出されていた〔宮本・瀬川・馬淵一九八七…一三二〕。しかし、「高砂族」に入れられたために、「漢族系」の人々との接触の度合いが減り、逆に固有の文化が保存される、という現象も見られた。

「平埔族」の漢化が、漢族の人々との婚姻と文化的な同化の両面から進んだことは、よく知られている。台湾へ渡った漢族の移民は、東南アジアへの移民と同様、その多くが単身での渡海であったため、渡航先で現地人の女性と結婚するケースが多かった。ただし、婚姻と一口に言ってもその様態は二種類あった。一つは「平埔族」女性の婚入であり、もう一つは、男性が「平埔族」女性の家に婿に入る場合である。周知の通り、漢族の社会は父系社会であるため、系譜の連続は父子を通してたど

られ、それに基づいて、位牌の祭祀、財産も継承される。そのため、極言すれば、婚入してくる女性がどのような民族であろうとも、子孫は漢族の家やリネージの構成員となるし、また、これにあわせて婚入する女性自身の意識も比較的早く漢化される<sup>(10)</sup>。そしてもちろん、漢族の文化も父子のラインを通じて継承される。よって、このような形態においては、婚姻によって、結果的には漢族の人口が増大し、「平埔族」の人口は減少する。また、文化的にも継承されるのは漢族の文化であり、「平埔族」のそれではない。

後者の場合には、男性は女性の所属する社会や家族の一員になることになる。特に母系制社会であれば、男性が女性の属する社会や家族に文化的にも取り込まれていく度合いは高くなる。しかし、他方、漢族の文化と「平埔族」とを比べた場合には、どうしてもより高度な文化を持つ漢族の文化に「平埔族」の文化は飲み込まれやすくなる。こうして、後者の場合でも、実際には、漢族文化への同化が促進され、「平埔族」が消えていくことになる。

「平埔族」の漢化について研究を行ってきたブラウンによれば、台南付近に分布していた「平埔族」と後から入植した漢族の人々が民族的に区分された最後の指標が、纏足であったという。このため、纏足が台湾総督府によって禁止された後は、両者を区分する指標がなくなり、「平埔族」は漢族と区別がつかなくなってしまうという [Brown 2004: 66]。

このような、「平埔族」の漢化には、もちろん、漢族からの

「中華思想」に基づく先住民蔑視のまなざしがあったことも否定できない。このため、先住民自身が、自らの民族的起源をなるべく覆い隠そうとしたことも重要な要因だろう。いずれにしても、「平埔族」は清朝以降の歴史の中で、漢族移民との接触を経て、婚姻による同化とともに文化的にも同化された。元「平埔族」の民族認定の要求が高まるようになった一九九〇年代に至るまで、台湾において「平埔族」の中で、独自の文化や言語がある程度まとまって残したのは、二〇〇一年に民族認定されたサオと、上記の二〇〇二年に民族認定されたクバランとなど限られた民族にすぎない。

### 三 漢化した「平埔族」としての「漢族系台湾人」

以上をまとめると、台湾には二つの漢化過程があったと言える。つまり、漢族移民男性は、婚入してきた「平埔族」配偶者を漢族コミュニティに取り込んで、漢族意識を植えた。他方、もともと「平埔族」だったコミュニティは、婚入してきた漢族男性および外の漢族コミュニティとの接触を通して文化的に漢化されたので、民族としてはほぼ消滅してしまった<sup>(11)</sup>。

ところが最近では、こうした考え方を否定する新しい見方が登場している。つまり、漢族と認識していた人々が、非漢族であると主張する事態が発生しているのである。それは、台湾における民主化や、台湾を中国とは異なる独自の国家であると主張する「台湾ナショナリズム」と深く関わっている。「台湾ナショナリズム」がなぜ、どのように発生したのかは本稿で

は紙幅の関係で論じないが、台湾を「中国」の一部と考えるのではなく、「中国」とは異なる台湾という国家があり、台湾人という国民が存在すると想像する人々が増えてきている。そして、「台湾人」という国民が想像され、それが実体化されるときに持ち出されてきたシンボルが、「平埔族」と漢族移民との混血が行われたという「平埔族」の血統を重視するという考え方と、日本統治を受けたという経験であった。後者については、すでに別のところで論じたのでここでは省略し(三尾二〇〇五を参照)、以下前者について考えてみよう。

前者の主張は、簡潔にまとめれば、現在、台湾において漢族と見なされてきた人々の中には、「平埔族」との混血が含まれており、それゆえに大陸の漢族とは異なる、という論理である。それは、上で掲げたような、婚入する女性の血統を問わないという考え方や、婿として先住民社会に入っていく男性を漢族社会から切り離すという伝統を逆転させ、先住民との混血がある、ということによって、生物学的にも文化的にも大陸の漢人とは異なる「漢族系台湾人」の存在を実体化させようとする試みでもある。ただ、この論理は、そもそも大陸においてすら、身体的、生物学的に純粋な漢族というものがほとんど存在し得なかっただろう、ということによって容易に反論される危険性がある。

ところが、「先住民の血の入った漢人」という論理をさらに超え、近年では、台湾で漢人だと思われてきた人々の多くは、「漢化した「平埔族」である、という議論が沸きあがっている。

例えば、台湾独立運動組織の一つである「台湾独立建国聯盟」という組織のウェブサイトに掲載された記事の中から代表的なものを一つ紹介しよう。その主張によれば、台湾は、「高山族」、「平埔族」、「福佬人」(閩南人)、「客家人」、および「新住民」(いわゆる外省人)からなり、それらが長い時間にわたって台湾において共存し、運命共同体となり「台湾民族」を形成しているという。また、台湾の人口構成は、単身で大陸から渡った「福佬人」、「客家人」で、現地の先住民と結婚して生れた子孫が全人口の一六・八%、「高山族」、「平埔族」、および早くに漢化した先住民が台湾の総人口の七七・四%、新住民が五・八%であるという (<http://www.wufi.org.tw/dbsql/showmsg.php?id=179>)。さらに、別の記事では、福佬人や客家人の多くは、「平埔族」が漢化しただけで、たとえ中国からの移民が混血していても、その移民の数は、割合としては決して大きくない、という (<http://www.wufi.org.tw/dbsql/main2k3/m030327.htm>)。この論理の特徴は、現在台湾で漢族に見える人々の多くは、遺伝的に大陸の漢族と同じではない、と主張するところにある、それゆえに、大陸の漢族と同根ではないために、中国大陆と台湾が不可分な一体をなすとは考えられず、よって兩岸を統一する必要はない、という展開になる。

上記の数字は、これまで私たちが慣れ親しんできた台湾の人口統計の数字とは大きく異なっている。例えば、現在の台湾の政府の中の「内政部」で出されている人口統計によれば、二〇〇五年九月の時点で、台湾の総人口は二二七四万四八三〇人、

うち原住民が四六万二九〇六人となっている (<http://www.ris.gov.tw/chA/statist/s10-1-9409.xls>)。日本時代の統計でも、一九四二年で「本島人」五八三万人、「高砂族」一六万人、「内地人」(在台日本人) 三八万人、計六四三万人である。「若林・劉・松永一九九〇」。

また、上記の主張は、従来定説とされてきた台湾の歴史——すなわち、清朝期における漢族移民の大量移入によって、台湾の人口が爆発的に増加した——ともまったく異なっている。例えば、戦後、中等教育で初めて定められた台湾史のテキストである『認識台湾』歴史篇では、清朝期になると、閩南人、粵人(広東人、ここでは客家のこと)が陸統と大量に移民してきて、漢人の開墾範囲が不断に拡張した、と書かれている。「国立編訳館主編一九九六・三三三」。また、台湾史の研究者として著名な周婉窈によれば、オランダ人が一七世紀中葉、大陸からの移民を導入して台湾開発を行った約二〇年の間に、台湾の漢族の人口は約一二万人となり、その数は、当時の土着の民族の人口とほぼ同じかすでにそれを上回っていたという。また、一九〇六年の日本による台湾領有初期には、「平埔族」を含まない土着民族の人口が一万余りに過ぎなかったのに対し、漢族の人口が約二九〇万人、また一九三六年の「平埔族」の人口は約五万八〇〇〇人余りであったという「周一九九八」。

もちろん、ここで筆者は上記の、台湾のマジオリティを漢化した「平埔族」であるとし、漢族移民の数を少なく見積もる歴史観が客観的であるかどうかを問おうとしているわけではな

い。また、上記の見解は、台湾独立を目標に掲げる団体に属する人々によって唱えられていることから見ても、民族を語ることによってそれを政治的なナショナリズムを正当化するための理論武装として用いようとしているということも理解される。そして、そのような見解が現在台湾の人々のどのくらいの人々、どのようなグループの人々によって受け入れられているのか、ということとは慎重に吟味していかなければならない。しかし、本稿ではとりあえず、漢族と思われていた人々をもはや遺伝的に漢族系ではないとすることで、兩岸の人々が同源同文化であり不可分の関係にあるという既存の主張を粉砕しようとしている人々が出現しつつあることを指摘しておきたい。

## おわりに

現在の「漢族系台湾人」の文化から、はたして彼らがもともと「平埔族」であり、中国文化の影響を受けて「漢化」した、すなわち、彼らは漢族を演ずる「平埔族」である、と推論できる確たる根拠は今のところない。ただ、最近、「漢族系台湾人」の文化に平埔族の文化要素が影響していることがしばしば指摘されるようになってきている。例えば、ピンロウをかむ習慣であるとか、台湾語(閩南語)の中で配偶者をあらわす「牽手」が「平埔族」の言葉に由来する、といったことである。このことが正しいならば、「漢族系台湾人」の文化の中に「平埔族」の文化の影響があった、ということについては主張しうるであろう。しかし、このような両者の関係は、現象面に限れ

ば、現段階では、「平埔族」が漢化した、という見方ができると同時に、漢族が「平埔」化したと見ることもできる。もちろん、「平埔族」の漢化を論じる人々は、それ以外にも血液遺伝学等による検証結果などを持ち出してきているので、今後先端的な科学によって、より客観的な論拠が見つかる可能性もあるかもしれない。

現在の「漢族系台湾人」の血の中に「平埔族」のそれが混じっていること、そして文化にも「平埔族」のそれが残存していることから、「漢族系台湾人」を大陸の漢族と異なるカテゴリーの民族とみなし、また日本統治や戦後の国民党統治などの歴史的经验という点からも、台湾が大陸とは異なる国家であるべきである、とする議論は、今日の台湾では一定程度受け入れられている。しかし、以上で述べてきたようなさらにラディカルな「漢族系台湾人」＝漢族を演じる「平埔族」論は、これまでの台湾史の常識を覆す議論である。この議論が、台湾を中国大陆と民族的に分から、ひいては国家としても別々の国家であることを主張するいつそう強い論拠として主張されていることはすでに述べたとおりである。しかしこの議論には、血統的に先住民の血統がとりわけ重要視されるものの、文化的には「漢族系」の文化が台湾の人々の文化の核心である、という意味では、大陸における少数民族の漢化と同じプロセスが想定されていること、また、民族論としては「中華民族多元一体格局論」との類似性が見られることについては、注意しておかなければならないだろう。

現在の台湾が国民統合を行っていくにあたっては、多数派の「漢族系台湾人」、とりわけ閩南系の文化や言語が社会の中で優勢にならざるをえない状況の中で、多元文化社会をどのように構築していくか、ということが課題になっている。あらゆる民族の文化が平等に遇され、多元的な文化が開花する社会が發展していくためには、いわゆる「大中華主義」的な文化観を克服していかなければならないだろう。その意味で、「漢文化」がどのように先住民の文化との関係で相対化されていくのかが問われるだろう。

そしてもう一つ最近無視し得ない要素として、台湾に婚入してくる東南アジアや中国からの花嫁が増えている、という現象がある。横田によれば、台湾では現在新婚夫婦の四組に一组が、台湾の男性と台湾以外の地域（中国大陸、ベトナム、タイ、インドネシアなど）出身の女性からなるカップルであるという「横田二〇〇五」。そして、このような女性たちは、台湾で生きていくにあたって、さまざまな文化の違いを超えて、台湾の文化に適應する努力が求められている。また、このようなカップルの子どもたちについて、最近小中学校で教育の実効が上がらない、といって批判する風潮があるという。そして、学校の教師や他の生徒の親たちが、このような子どもたちの問題を母親の問題とみなし、特に東南アジア出身の女性に中国文化を教える身につかないから、子どもたちの学習障害がおきる、と批判する風潮があるという「横田二〇〇六」。こうした視線のありようは、かつて「漢族系」の人々が先住民を眼差し

た目線を思い起こさせないだろうか。台湾の多元文化社会を構築していくには、台湾の先住民文化と「漢族系」文化との関係を再構築すると同時に、先住民や新移民を中華思想で眼差す視線からも自らを解放していけるかどうか、ということも重大な課題であるように思われる。

## 注

〈1〉ただし所属する国家の相異によって生活環境や教育が異なるなど、同じ民族とは言っても経験の違いが積み重なれば、自他を差異化していく思考が生まれる可能性も高くなる。例えば、モンゴル族については、Borchigand Wurlig, 1996を参照。

〈2〉このような議論は、もちろん民族や文化に関係する問題であるが、そこには台湾と大陸との政治的な関係が分かちがたく結びついており、きわめて政治的に敏感なイシューでもある。

〈3〉「漢族系台湾人」は、本文で後述する「本省人」とカテゴリーとしては近い。しかし、「本省人」は「外省人」との対比で使われるため政治的な意味が強いため、本稿では使用しない。

〈4〉「高砂族」の分類は研究者によってさまざまな異なる説があるが、昭和期前半に台北帝国大学の移川子之藏、宮本延人、馬淵東一の共著による『高砂族系統所属の研究』（一九三五年）において九族に分類された。それらは、アミ、サイシャット、タイヤル、ツォウ、パイワン、ブヌン、プユマ、ルカイ、ヤミで、戦後の中華民国政府の先住民行政においてもこの分類が長く使われた。平埔族についても、言語学者、人類学者等によってさまざまな下位分類がなされている。先住民の分類や研究史については、「日本順益台湾原住民族研究会編 二〇〇一」を

参照されたい。

〈5〉日本時代には、「漢化」の度合いを「文明化」に読み替えて日本による支配を正当化しようとした、との議論もあるが「坂野 二〇〇五」、ここではこの議論には立ち入らない。

〈6〉現在憲法で公認されている先住民の総称。集団としての先住民については、「原住民族」という。下位区分としては、二〇〇六年五月現在、アミ、クバラン、サイシャット、サオ、タイヤル、タロコ、ツォウ、パイワン、ブヌン、プユマ、ルカイ、ヤミ（タオ）の一二民族が認められている。

〈7〉日本時代、戸口調査簿の種族欄に「平」あるいは「熟」と記載された人々は「平埔族」であり、これらの人々は戦後漢族扱いを受けた。戦後先住民身分を持たずに来た人の民族認定の問題については、「林 二〇〇三」参照。

〈8〉当時の先住民自身にはもちろん「民族」という概念があつたわけではない。さまざまな調査報告書に見る先住民（台湾原住民）の分類の異同については、「陳 一九九八」を参照されたい。

〈9〉単身で移民する男性のことは「羅漢脚」と呼ばれた。また父方祖先は中国から来たが母方が先住民であったことは、「有唐山公、没唐山媽」と呼び慣わされた。

〈10〉このような個人の婚姻による漢族へのアイデンティティの変化を、ブラウンは、Short-Route Identity Changeと呼んでいる [Brown 2004]。

〈11〉ブラウンは主に文化的な漢化による「平埔族」のコミュニティ全体のアイデンティティの変化を、Long-Route Identity Changeと呼んでいる [Brown 2004]。

〈12〉もちろん、先住民——とくに平地に居住していた先住民——は、このほか、交易や、武力闘争、土地の収奪などさまざまな理由で、漢族に同化されていた。

〈13〉一九七〇年にアメリカ、日本、カナダ、ヨーロッパなどで活動していた亡命台湾人による台湾独立運動組織と台湾島内で活動していた組織が団結して結成した組織(当初の名称は、「台湾独立聯盟」)。基本的には言論活動を中心とした平和的な運動を展開している。

〈14〉「漢族系台湾人」が土着化した漢人という役割を演じる漢化した「平埔族」であるということについての議論は、このほか「施二〇〇四」黄一九九八」なども参照。黄昭堂は、一九三二年台湾生まれで、現在、台湾独立建国聯盟主席、昭和大学名誉教授。

〈15〉自然科学的な検証および混血と文化の複雑な組合せが生みだすエスニックアイデンティティの可能性については「施二〇〇四」を参照。

#### 文献一覧

- Borchigud Wurlig 1996 "Transgressing Ethnic and National Boundaries: Contemporary Inner Mongolian Identities in China," Melissa J. Brown (ed.), *Negotiating Ethnicities in China and Taiwan*, Institute of East Asian Studies.
- Brown Melissa 2004 *Is Taiwan Chinese? The Impact of Culture, Power, and Migration on Changing Identities*, University of California Press.
- 陳文玲 一九九八 「サイシャット」の民族名称に関する一考察「台湾原住民研究」三:一七八—一九六。
- 国立編訳館主編 一九九六 『国民中学 認識台湾』歴史篇、台北:国立編訳館。
- 黄昭堂 一九九八 『黄昭堂独立文集』台北:前衛出版社。
- 林修澈 二〇〇三 『噶瑪蘭族の人口与分布』台北:行政院原住民委員會。

三尾裕子 二〇〇五 「普段着の台湾ナショナリズム」『アジア遊学』八一:四八—五八。

宮本延人・瀬川孝吉・馬淵東一 一九八七 「台湾の民族と文化」東京:六興出版。

毛里和子 一九九八 「周縁からの中国——民族問題と国家」東京:東京大学出版会。

日本順益台湾原住民研究会編 二〇〇一 『台湾原住民研究概覧——日本からの視点』東京:風響社。

坂野徹 二〇〇五 「帝国日本と人類学者——一八八四—一九五二年」東京:勁草書房。

施正鋒(森田健嗣訳) 二〇〇四 「台湾平埔族のアイデンティティ」山本春樹/黄智慧/パスヤ・ポイツォヌ/下村作次郎編

『台湾原住民の現在』東京:草風館、八七—九九頁。

周婉窈 一九九八 『台湾歴史図説——史前至一九四五年』台北:聯経出版事業公司。

若林正丈・劉進慶・松永正義編 一九九〇 『台湾百科』東京:大修館書店。

横田祥子 二〇〇五 「東南アジア移民女性の産褥実践——台湾中部台中県東勢鎮の事例から」『民俗文化研究』六:二三八—二四八。

横田祥子 二〇〇六 「文化中国」意識と多文化主義のせめぎあい——台湾・東南アジア系移民受容の対応から」『第八回台湾学会発表論文集』日本台湾学会。